

研究分野	資源生態	部名	漁業開発部
研究課題名	沿岸漁場整備開発調査 ウスメバル増殖試験		
予算区分	水産基盤整備費		
試験研究実施年度・研究期間	H.11～		
担当	吉田 雅範		
協力・分担関係	青森市水産指導センター		

〈目的〉

陸奥湾内に着底したウスメバル稚魚の生態を把握することにより、漁獲対象資源であるウスメバルにはたす陸奥湾の役割を解明し、今後のウスメバル資源の保護及び増大についての知見を得ることを目的とする。

〈試験研究方法〉

1 標識放流試験（中間育成魚）

2003年に青森県水産総合研究センター増養殖研究所で種苗生産し、青森市水産指導センターまたは小泊漁港内で中間育成したウスメバル幼魚に標識を装着し、2004年6月16日に脇野沢村鯛島周辺水深約30mで船上放流した（表1）。

2 標識放流試験（現場放流）

2004年10～11月に、陸奥湾口部の脇野沢前沖において、釣りにより漁獲されたウスメバル未成魚に標識を装着し、水圧付加手法による放流を行った（表2）。

表1 標識放流結果（中間育成）

放流月日	2004/6/16
放流場所	脇野沢村鯛島周辺
現場水深	30m
放流方法	船上放流
放流尾数	949
平均TL	126mm
標識種類	ハゲタイク <sup>®</sup> 18mm
色	黄色
刻印	7オスI2004

表2 標識放流結果（現場放流）

放流月日	2004/10/21～11/6
放流場所	脇野沢村前沖人工礁周辺
現場水深	40～60m
放流方法	水圧付加手法（放流かご）
放流尾数	51
平均TL	*
標識種類	ハゲタイク <sup>®</sup> 18mm
色	青色
刻印	7オスI203-280

\*水圧付加手法のため船上での魚体測定は不可能

〈結果の概要・要約〉

これまでの各年の放流群について、放流後20日以内に放流地点周辺で再捕されたものを除いた放流と再捕の位置関係を示した（図1）。春季に陸奥湾奥部に放流されたウスメバル幼魚は、秋季から冬季にかけて津軽半島東岸を湾口方向へと移動し、約1年後となる翌春には湾口部周辺へ到達すると推察されており、データ追加後も同様の結果が推測された。

日本海周辺及び陸奥湾のウスメバルはほぼ均質な遺伝的組成を持っていること、陸奥湾にウスメバル親魚が生息しないこと等から、陸奥湾のウスメバルは日本海起源であり、陸奥湾で未成魚期を過ごしたウスメバルは陸奥湾の高水温（秋季）及び低水温（冬季）がきっかけとなり、湾奥から湾口へ、さらに湾外へ逃避移動するものと考えられている。

〈主要成果の具体的なデータ〉

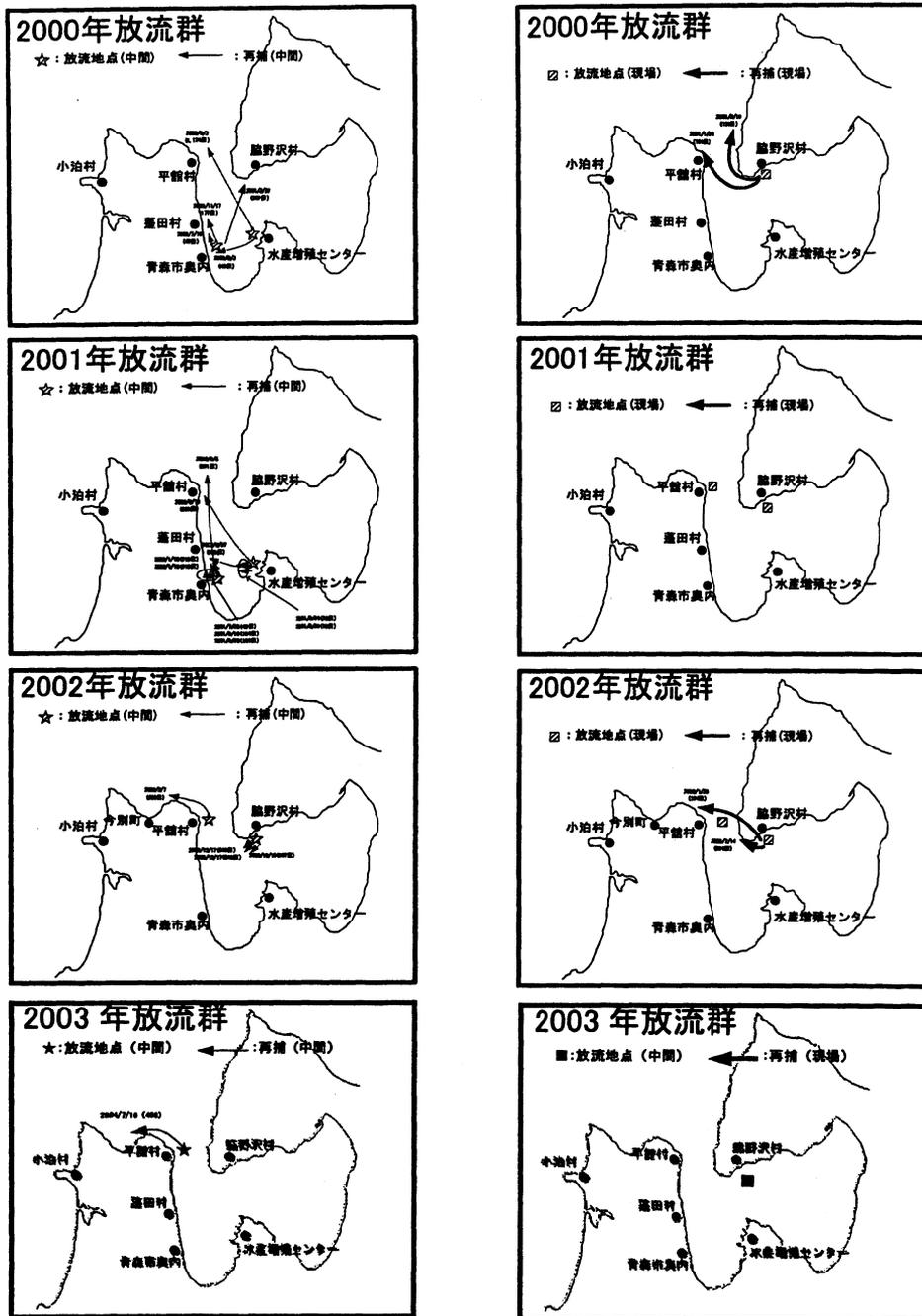


図1 放流と再捕との関係 (放流後20日以内の再捕例を除く)

※図中の年月日は再捕年月日、( )内は再捕までの日数

〈今後の問題点〉

- ・本県ウスメバル資源の主体をなす日本海の資源との関係についての検討。
- ・陸奥湾の「ゆりかご」効果を維持・増大させるための方策の検討。

〈次年度の具体的計画〉

- ・同様の手法で湾口からの移動を中心に調査を進める。

〈結果の発表・活用状況等〉

- ・調査結果は地元学習会で発表した。
- ・水産基盤整備事業の事業計画策定のための資料として活用。